

防護服不足深刻 ポリ袋で手作り

感染おびきの現場

医療従事者が使う感染防護具のマスクやガウンが、新型コロナウイルス患者を受け入れている病院でも不足しています。マスクの使い回しや、ガウンをポリ袋で手作りしている病院もあり、医療従事者は院内感染におびえながら治療を続けています。

(染矢ゆう子)

神奈川県横須賀市の横須賀市立市民病院には、新型コロナウイルスに感染した患者が入院しています。患者を受け入れている感染症病棟では、4月から45歳のポリ袋で作ったエプロンを使つて看護師が看護しています。ポリ袋製のエプロンには袖がないので、雨がっぱを大量に発注し、組み合はせて使っています。

4月16日には同病棟の看護師が新型コロナに感染しました。同病棟の看護師で2人目です。

同病院事務部長の忽田（そうだ）晃さんは「そのほかに感染者はいなかった



ポリ袋で作ったガウン（日本共産党の松下二郎幹事長撮影）

ので防護具のせいとは断定できません」といいます。

1着の値段急騰

ただ、看護には使い捨ての防護具が必須です。正規の防護具の備蓄は残り8700枚。2カ月で底を突きました。中国で生産されてきた防護具の供給は少しづつ増えましたが、値段は急騰。1着が3000円と以前の10~20倍になっていると忽田さんはいいます。

20分以上患者の相手をするときや夜勤のときは正規の防護具、短時間では代替品と使い分けています。「マスクや消毒用アルコー

ルのジェルも必要な分が入くなり、手作りしています。1日300枚使うガウンは24日に1500枚ほどしか残っていなかったようです。

同市の学校職員が1日約500枚を作製して応援しています。120枚のポリ袋を熱処理工具で接着し、はさみでカット。作り方や型紙をホームページで公開しています。同病院の担当者は「物流が止まり、どの医療機関も困っていると思う。使ってもらえば」と話します。

新型コロナ患者を受け入れている大阪府内の公立病院では、これから防護具にポリ袋が使われ始めます。試しに着た同病院の看護師は「暑かった」と話します。別の看護師は「防護具がなかなか入ってこないとは聞いていたが、まさかポリ袋で作るとは思わなかつた。コロナ病棟では自分が感染するんじゃないかなと不安に思いながら勤務している。手作りでも前が開いて

ができないことに少し安心した」と話します。

個人が使い回し

マスクも足りません。東京都内の感染症指定病院に勤務する都内の医師はこれまで使い捨てていた高機能マスクのN95マスクを使い回しているといいます。

（3月30日）同協会の福井トシ子会長は22日、都内の記者会見で、防護具などの検査指示や、マスクを使用できるスタッフ・枚数の限定期との実態を訴え、「防護具の不足で十分な感染防止策がとれない」と対策の必要性を強調しています。

政府は医療用のサービス構築するとしています。在庫が一週間分より少ない場合に都道府県を介さず直接発送するといいますが、ガウンやフェイスシールドの同様のシステム構築は5月下旬になる予定です。日本共産党は「不足している医療用マスク、フェイスシールド、防護服、消毒液、人工呼吸器などを国がメーカーに要請して増産・調達するなど、国の責任で必要数を確保」するよう政

府に緊急提案しています。